

茨城高等学校・中学校

校長室だより

2022年1月14日

グレタさんに叱られる

永遠の5歳児、チョコちゃん・・・ではなく、グレタさんが怒っています。

グレタ・トゥーンベリさんは、15歳の時、スウェーデン議会の前でたった一人「気候のための学校ストライキ」を行った、2003年生まれのスウェーデンの環境活動家です。その後も国連気候変動会議で演説を行うなど、気候変動対策を求める数々の活動を通じて、地球温暖化問題を論じるうえでの、いわゆるZ世代のアイコン的存在となりました。

グレタさんが怒っているのは、2021年11月に英国スコットランド・グラスゴーで開催された国連気候変動枠組条約第26回締約国会議、通称COP26に対してです。COPは、大気中の温室効果ガスの濃度を安定させることを目標に、世界の国々が力を合わせ地球温暖化対策に取り組むための国際会議で、1995年に第1回のCOP1が行われました。COPでは、年々深刻化していく地球温暖化の改善のため、温室効果ガスの排出削減目標値や、目標達成のための援助金などについて議論が交わされ、合意事項についての成果文書が採択されていきます。

グレタさんは「COPは美しいスピーチを述べるPRイベントになってしまった。しかし各国のリーダーたちはカーテンの後ろで抜本的な行動を拒絶している」「COP26が失敗なのは明らかだ。今までと同じ方法ではこの危機を解決できない」などと厳しい表現で批判しています。

COP26の期間中、グレタさんらが呼びかけた11月5日「ユースデー」のデモには2万5千人もの人々が参加し、「絶滅を選ばな」「私は年を取ってから死にたい」「今すぐ行動を」などのプラカードを掲げた若者たちのニュース映像が世界に伝えられました。

COP26では、“気温上昇を2度未満に保ち、1.5度を努力目標とする”という6年前のパリ協定の採択をさらに進め、“世界の平均気温の上昇を1.5度に抑える努力を追求する”とした成果文書が採択されました。また、目標達成のため、2030年に向けた各国の削減目標を2022年の年末までに検証し強化を要請することで合意し、さらなる削減目標の見直しを求める内容も盛り込まれました。

一方で、大量の二酸化炭素を排出する石炭火力発電については、当初“排出削減対策が取られていない石炭火力発電と化石燃料への補助金の段階的な廃止を加速する”とされていた議長案が、採択直前に、インドなどの強い反対により“段階的な削減へ努力を加速する”と表現が弱められ、先進国や温暖化による海面上昇を懸念する新興国島国からは失望の声があがりました。

専門家からは、「パリ協定では努力目標に過ぎなかった1.5度に気温上昇を抑えるこ

とが、世界の共通目標になったのは大きな成果であり、歴史的なことと受け止めている」とCOP26を評価する声がある他方で、国連のグテーレス事務総長は「1.5度に抑える目標を再確認し、気候変動の被害に苦しむ国々への支援を強化する必要性を示した」としつつも「これは歓迎すべき一歩だが十分とは言えない。成果文書は今の世界の利権や矛盾、それに政治的な意思を反映した妥協の産物だ」と指摘しています。

2021年、『人新世の「資本論」』斎藤幸平著（集英社新書）は40万部超の大ベストセラーとなりました。「人新世（ひとしんせい）」という聞き慣れない言葉は、地質学的に見た新たな年代の名称で、地上の道路やビルや農地、海洋プラスチックゴミ、大気中における二酸化炭素の増大など、人間たちの活動の痕跡が地球の表面を覆いつくした年代という意味であると説明されています。

斎藤氏は『人新世の「資本論」』の中で、グローバルノース（先進国）の暮らしを「帝国的生活様式」と評しています。帝国的生活様式は大量生産・大量消費を基盤に生み出される豊かな経済社会のことです。しかし、グローバルノースが帝国的生活様式を維持する陰には、グローバルサウス（途上国・新興国）からの収奪（例えば安い労働力、安く買ったたかれる資源）や、豊かな生活の代償をグローバルサウスへ押しつけている現実があります。ひたすらに経済成長を志向するグローバル資本主義にあつては、グローバルサウスの犠牲が増えれば増えるほど大企業の収益は上がり、グローバルノースの人々の豊かな生活がそれによって維持されているという図式が存在するのです。

さらに斎藤氏は、資本主義の収奪の対象は地球環境そのものにも向かっている、と言います。グローバルノースがグローバルサウスを収奪の対象としたように、資本主義は自然そのものも掠奪の対象としており、そのような社会システムが無限の経済成長を目指せば地球環境が危機的状況に陥るのは当然の帰結である、と述べています。

資本主義の自然からの掠奪の例として、パーム油の話が紹介されていました。パーム油とは熱帯雨林地帯で栽培されるアブラヤシを原料とする植物油です。価格が安く酸化しにくいことから、加工食品やお菓子、ファーストフードなどに利用されています。パーム油が生産されるインドネシアやマレーシアでは、今世紀に入ってアブラヤシの栽培面積が倍増しており、熱帯雨林の乱開発による生態系の破壊がすすんでいます。それは同時に熱帯雨林の自然に依存して暮らしてきた人々の生活の破壊も意味します。熱帯雨林を農場として切り拓いた結果、土壌浸食が起り、肥料・農薬が河川に流失して川魚が減少しています。川魚からタンパク質を取っていたこの地域の人々は、それができなくなり、以前よりお金が必要になります。その結果人々は、金銭を目当てに野生動物、とりわけオランウータンやトラなどの絶滅危惧種の違法取引に手を染めるようになった、というのです。

「人新世」とは、人類の経済活動が地球全体を覆い尽くし、自然からの収奪や、豊かな生活の代償を自然に転嫁することが限界を迎えた時代と言えるでしょう。その環境危機を乗り越えるため、斎藤氏が導き出したキーワードは「脱成長」です。無限の経済成長を求める資本主義の中では環境への負荷は必然的に増大します。斎藤氏は、経済成長こそが気候変動をはじめとする環境危機の原因であると指摘します。そして、19世紀に『資本論』を著したマルクスについて残されていた新資料を読み直し、「脱成長 Kommunismus」とい

うラディカルな（筆者個人の感想です）主張を展開していくのです。

2022年1月1日の朝日新聞に、「子孫にとって“よき祖先”であろう」「将来世代の資源を奪うのは“植民地化”だ」という見出しで、文化思想家のローマン・クルツナリック氏へのインタビュー記事が掲載されていました。記事の一部を引用します。

クルツナリックさんは(中略)現代の世界をめぐる、「行き過ぎた短期思考」に覆われている、と指摘していた。

「私たちの関心は『今、ここ』だけに集中し、未来を見据えてなすべきことをじっくりと考える『長期思考』が欠けています。『よき祖先』という発想は、私のオリジナルではありません。ポリオのワクチンを開発した学者が1970年代に発した言葉でした。まさに私が求めていた言葉だった」

「20××年の未来から考えよう」といわれると、まるでSFのようで現実感がないと受け取る人がいるかもしれない。だがクルツナリックさんは「極めて具体的で、実践的な話なのです。だからこそ『祖先』という言葉がぴんときた」と振り返る。

「子どもたちやまだ生まれていない将来世代は、当然ながら選挙権も、市場に対する影響力も持てない。それをよいことに好き勝手に生態系を壊し、技術開発の負の側面を後世に押しつける。これは何かに似ていると考えました」

何か。クルツナリックさんは「植民地」だという。

「歴史のなかで、もともと住んでいた人たちの世界を征服して植民地化してきた。いま私たちは未来世代の資源などを奪い、植民地化しているのです」

読んでみて、『人新世の「資本論」』の斎藤氏の視点に非常に近いことに気づくと思います。さしずめ斎藤氏ならば、「グローバル資本主義による、未来からの収奪、未来への責任転嫁」などと表現するかもしれません。

環境危機を論じるうえで、経済か環境かという二項対立を避けることはできません。環境危機は人間の作った国境など無関係に拡大します。そこでCOPのような多国間の連携した取り組みが必要となるわけですが、ことはそう簡単ではありません。

環境危機を改善すべく温室効果ガスの排出制限の強化を積極的に主張しているのは、主に先進国と呼ばれる国々です。それに対する新興国側の「先進国はこれまで自然環境を破壊することで快適で豊かな生活を享受してきた。それを棚に上げて、新興国に先進国同様の制限が課せられるのは不公平だ。気候変動の要因をほとんどつくっていない新興国は、先進国が行ってきた環境破壊のツケを払わされている」という主張ももともとと言わざるを得ません。

気候変動対策は人類の抱える最も難易度の高い課題と言えます。気候変動のもたらす環境危機に比べればコロナ禍など小さな問題だった、と回顧するそう遠くない未来が訪れようとしているのかもしれません。

クルツナリック氏は2100年の世界を想像していただくことを呼びかけています。それは、「ずいぶんと遠い未来の話」ではなく、現在10歳の子どもたちが生き続けているかもしれない世界だ、と述べています。私たちには「よき祖先」となって、彼らに「よき未来」を手渡す義務があるのです。

今回、この文章を書くにあたり気候変動問題について調べていく中で、温暖化は人間の経済活動とは無関係に地球の自然がもたらした定期的な気温変動サイクルによるものである、とする説も散見されました。

筆者は、もちろん専門的な知識があるわけではありません。しかし、南極の氷床の変化について精密なデータにもとづき説明している『南極の氷に何が起きているか』（中公新書）で、著者の杉山慎氏が、数十万年にわたって雪が積み重なってできた南極の氷から年代ごとの大気中に含まれる二酸化炭素濃度の変化を調査した結果、過去80万年にわたって170～280 ppmの範囲内で一定の規則正しい変化を示してきた二酸化炭素濃度が、産業革命が起こった西暦1800年代から急上昇し、400 ppmを超えて現在も上昇し続けていることと、それと比例するように地球全体の平均気温が上昇し、南極やグリーンランドの氷床が減少または消失し、スーパー台風や巨大竜巻、異常高温の中での大規模な山火事が多発している地球の現状を結びつけないことのほうが、不自然に感じられます。

また、ネットには、グretaさんらの活動に賛同する声もあれば、逆に批判する意見も多く見られます。そうした批判で広く共通しているのは、「グretaさんは、政治リーダーたちの気候変動対策について批判はするが、自ら具体案を出せていない」という点です。グretaさんは「今まで世界が経験したことのないような即効性のある排出削減が必要」と一貫して主張していますが、それが具体的に何であるのかは示せていません。この点がグretaさんの弱点であり、“アンチ・グreta”の人たちからすれば格好の批判の材料となっているのです。

グretaさんに対する批判の中には、「アスペルガー症候群のグretaさんの主張は情緒的外的外れ、耳を貸す必要はない」という主旨のものもありました。（グretaさんは、自身がアスペルガー症候群であることを公表し、それを自ら“スーパーパワー”と名付けています。）本文のテーマから少し脱線しますが、この批判のほうこそ的外れです。歴史的な偉業を行った、たとえばアルベルト・アインシュタインやレオナルド・ダ・ヴィンチ等も何らかの発達障害を抱えていたという説が濃厚です。その人の主張の中身に依拠するのではなく、その人の特性に依拠して意見を否定するという姿勢は、まったく非論理的です。

中には、グretaさんの活動を嫌中（中国ざらい）思想と結びつけた批判や、荒唐無稽な陰謀説なども存在していました。中学生、高校生諸君には、高いメディアリテラシー能力が求められていることを改めて強く感じました。

ネットでグretaさんに関する記事を読んでいく中で、「グretaを論破するオーストラリア人の司会者」という動画を見つけ、おもしろそうなので観てみました。

「生態系が破壊され、大量絶滅が始まろうとしているときに、あなたがた（大人）はお金や経済成長に固執している」と激しい言葉で演説するグretaさんの動画に続いて、オーストラリア人の司会者という、高そうなスーツを着た怖い顔のオジさんが登場し、約1分間、マシンガンのようにまくし立てます。

「気候変動デモをやっている学生たちに言っておきたいことがある。全ての教室にエアコン設置が義務づけられたのは、君たちの世代から。全室にテレビを欲しがり、各教室には

コンピュータが備わっている。電子機器無しには朝も夜もなく、歩きや自転車での登下校なんて、もう君らの誰もしたがない。送り迎えの車が列をなし、郊外の道をふさぎラッシュアワーを悪化させている。君らの世代ほど大量工場生産品を消費する者もない。トレンドイであるために常に最新で完璧な高級品を求めている。君らのエンタメも電子機器から発信されているね。

さらに言わせてもらえば君らのデモを扇動しているお仲間こそ移民政策を通して人口の爆増を推進しているわけだけど、それにはより一層の資源、生産、運輸が不可欠だ。人口が増えれば、その分だけ土地を活用するために森林を伐採し、国土を切り拓く。つまりは環境が破壊されるわけだ。

だからさ、こういうのはどうだろう？先生にエアコンを切るように言ってくれ。登下校は歩きか自転車にしよう。電子機器は使わずに本を読もう。既製品のファーストフードもだめだ。サンドイッチを自分で作ろう。でもやらないんだろ？誰もやらない。なぜなら君らはトンチキ教育を受けた、自分勝手に自己讃美と他罰に忙しいウンコ頭。かつてないほど恵まれた西欧文明と上等の生活に身を浸しながら『高貴な使命』に陶醉している・・・、そんな大人たちに影響されてるんだ。目を覚ませ。成長しろ。もう口を閉じろ」

この怖い顔のオジさんの言っていることは、半分当たっていて、半分間違っています。

まず、若者たちに個人レベルでの生活の変化を要求している点ですが、妥当といえると思います。気候変動問題に対処するうえで、斉藤氏が「帝國的な生活様式」と呼ぶ、私たちの快適で豊かな生活を見直し、変化させることは不可欠です。個人生活で排出される二酸化炭素のほとんどは、電力、ガス、ガソリンの消費からきています。電気の使用量や自動車の利用量を減らせば、個人レベルで排出される二酸化炭素の量を大きく減らすことができるのです。

逆にオジさんの間違っている点は、個人レベルでの努力で環境危機に対処しようとしており、抜本的な解決を目指していないことです。気候変動問題は、今や個人の生活習慣の見直し程度の努力では改善できない状況に至っています。危機はすでに始まっています。『南極の氷に何が起きているか』で杉山氏は「地球の気候は急な坂を転がり落ちており、もうその変化を食い止めることはできない。ただしその変化に少しでもブレーキをかけることは可能であり、それには社会全体の真剣な対策が必要不可欠である」と書いています。

人類全員が等しく直面している環境危機に立ち向かうためには、「社会全体」、すなわち社会システムを変化させ、必要であればその痛みを共有する覚悟が求められているということです。そしてその変化を起こすためには「声」が必要です。口をつぐんでは絶対にダメです。大切なのは、環境危機への対策の必要性を訴え続け、多くの人々がそれに共感し、行動する社会をつくりあげていくことです。

グretaさんは **Twitter** でコメントしています。「COP26は終わった。簡単に要約すると中身の無いおしゃべりだった。だけど本当の仕事は会議場の外で続く。決してあきらめない」と。

ひだまりの縁側で

※ここからは、NHK「チョコちゃんに叱られる」の最後のお便り紹介コーナーをイメージして読んでください。「那珂川の黒いトリ」は登場しません。

それではここでお便りを紹介します。茨城県水戸市の、かつはるちゃん（5さい）からの質問です。「ここまで読んで、環境危機への対策が必要ということはわかったのですが、筆者の人はどんな対策を行っているのですか？」

なるほどね。今回、「校長室だより」を書きながら、自分でも「それじゃ、あなた自身はどんな対策を行っているの？」と、きっと聞かれるだろうという気がしていました。それでは筆者が行っている環境危機対策について、A：よい、B：まあまあよい、C：普通、の3段階で自己評価してみたいと思います。

その1：出張などで自家用車を利用する必要がなく、雨じゃない日は自転車で通勤している。（実はダイエット目的との説あり）・・・評価レベルB

その2：家庭ゴミを分別し、自治体の資源ゴミや地域の子供会のリサイクルに協力している。・・・評価レベルC

その3：校長室のエアコンをできるだけ使わない、または使う場合も、夏はできるだけ高く、冬はできるだけ低く温度設定している。・・・評価レベルC

その4：買物をしたときレジ袋を買わない、コンビニでおしぼり等をもらわない。・・・評価レベルC

その5：・・・思いつきません（汗）

こうしてみると、環境対策が必要と頭ではわかっていながら、なかなか行動として取り組めていない自分自身に気づき、反省させられました。

繰り返しになりますが、気候変動問題は人類が直面する緊急の、そして最も難易度の高い課題です。しかし、危機を解消する具体的な道のはまだ見えてきていません。今、私たち一人ひとりに正しく問題意識を持ち、そして迅速に行動することが求められています。グレタさんに「Du lever inte！（デュ リベリンタ）」と叱られないように。

注）Du lever inte スウェーデン語。「ボーッと生きてんじゃねえよ」の意味。